

北米のユダヤ人

西村祐子 駒澤大学教授

1 バルセロナのシナゴーク

二〇一〇年にスペインのバルセロナを訪れた時、二〇〇二年に一般公開がはじまっていたシナゴーク（ユダヤ教の会堂）を訪れた。英国からの帰路にスペインに立ち寄ってバルセロナの近郊にあるイグアラダという古い皮革のまちを訪ねようとしていたところだった。

ローマ時代の石畳がそのままに残るゴシックの建物が続く狭い通りにシナゴークは建つ。ここはかつてユダヤ人地区だったところで、三〜四世紀あたり

につくられたこのシナゴークはスペインでもっとも古い。一四世紀末に閉じられて以来、その存在は歴史に埋もれ倉庫にされていたが、紆余曲折を経て二〇世紀末によく発見された。アルゼンチン出身のユダヤ人実業家がそれを買い取った。そして修復し、博物館にしたのだ。バルセロナにいるユダヤ人たちは色めき立った。なぜならこのシナゴークはスペインだけでなくヨーロッパでもっとも古いもののひとつと目されたからで、ユダヤ人たちがバルセロナ周辺に三〜四世紀以前から住んでいた証でもあるからだ。彼らはトローラー（ユダヤ教の聖典）や蠟

燭台そくたいなどを知り合いのユダヤ人たちから寄贈してもらい、この場所はユダヤ人の足跡をたどる場所のひとつになったのだった。

●ペストはユダヤ人のせい？

一四世紀、そのシナゴークが閉じられたのは一三九一年におこったユダヤ人の虐殺のすぐあとだ。当時、バルセロナには数千名のユダヤ人がゲットーに住んでいて、その中心にシナゴークがあった。案内役の青年が口を開いた。「一三九一年八月五日、一般市民がこのシナゴークに押し寄せてユダヤ教徒を虐殺したのです。三〇〇名あまりが惨殺され、残ったユダヤ人は強制的に改宗させられました」。

難を逃れたのはユダヤの丘と呼ばれるユダヤ人用の墓地に集っていた人々だった。追っ手はそこにも押し寄せ、その場で改宗するか死かを迫った。やむなく改宗せざるを得なかった。そもそもなぜバルセロナの市民たちがそんな暴挙に出たのだろうか。案内人の青年は続ける。

「実は当時ヨーロッパは黒死病（ペスト）と呼ばれ

る病気が蔓延まんえんしていたのです。ペストは恐ろしい病気でみんながバタバタ倒れてしまいました。欧州では七五〇〇万人以上死んだとされています。スペインではとくに死者が多かったのですが、ユダヤ人はあまり犠牲になりませんでした。それで人々が怪しみだしたのです。きつとほかの人々を殺すため井戸に毒を入れたとの噂が立ち、扇動された人々がユダヤ人を襲ったのです」。聞いてみると、なにやら他人事とは思えない。日本でも関東大震災の時に在日朝鮮人が井戸に毒を入れたというデマが流布して流血の惨事を招いたという話があるからだ。

案内役の若者がバルセロナのユダヤ人の悲劇の歴史を語るのを聞いて、私は興味を覚え、しきりに質問した。だが、ふと気づくとほかの聴衆からは一切質問もコメントもない。悲しそうな表情をしながら、ごく静かにうなずいているだけだ。今考えればそれはおそらく、彼らにとっではすでに予習済み、周知の事実だったからではないかと思える。

青年は続けた。

「事実は違います。ユダヤ人は律法の教えで食事の前に手を洗うことを義務づけられていたからです。ユダヤ人は当時から衛生的だったのです。ユダヤ人以外は手を洗わずに食事をしていたから、ペストにかかったんです」。

私はその話を聞きながら、もつと説得力がある理由を考えていた。それはユダヤ人には皮なめし職人が多かったからではないか。

ペストは同時期にロンドンでも大流行していた。ロンドン市民は、あることに気がついた。なめし工房で働く人々がペストにかからないことだった。ロンドンでもなめし場はテムズ河を隔てた市街地にあったが、そこでは誰もペストにかかっていない。「きつとなめし工房近くに住めばいいはずだ」。人々はわざわざなめし工房の近くに移住していった。のちに近代細菌学が発達してから、それが正しい選択だったことがあきらかにされた。

なめしに使う動物の糞尿ふんから醸し出されるガスは、天然のペニシリンだったのである。それを作

業中に吸っていた労働者たちは、ペストから守られたのだった。だから、私はバルセロナのユダヤ人がペストにかからなかったのも、ユダヤ人に多かったなめし職人のおかげだったのではないかと思ったのだ。ユダヤ人の居住区のなかにあったであろうなめし工房が人々を救った、と。

このシナゴグにまつわるユダヤ人の皮革職人たちの歴史を尋ねようと、案内の青年を通訳にして、ラバイ（宗教的指導者）に質問しようとしたのだが、「実はこのラバイは最近東欧からやってきたひとで土地の歴史についても何もわからないのです」と言われ、苦笑してしまった。だが考えてみると、イベリア半島では一四世紀以降棄教が強制され、ユダヤ教の「正統派」は消滅せざるを得なかったのだ。ドイツや東欧諸国や英国などで、たとえゲットーのなかであれ、シナゴグを建てて礼拝をすることが認められていた諸国とは大きな違いがある。ラバイが赴任し、ユダヤ教の伝統が、こうしてイベリア半島にまた戻ってきたということを、イベリア半島に帰

還を許されたユダヤ人たちは喜んでいたのであった。

2 謎の紳士と彼の父親

説明会が終わってからなかに展示されている品々を見てみると、パナマ帽をかぶり麻の白い上下のスーツを端然と着込んだ男性が私に話しかけてきた。つれあいと見える金髪の女性と一緒にだったが、二人ともあきらかにインテリだ。ユダヤ人観光客のなかにただ一人座っている東洋人の私に興味を抑えきれなかつたらしい。日本人だと言うと、ますます興味をもつたらしく、なぜここを訪れたのかと聞いてくる。ユダヤ人と皮革業の関連を調べているのだという、目を輝かせた。ユダヤ人に皮革職人が多かったという話は知らなかつたらしいが、彼の知り合いのユダヤ人の歴史家ならば知っているかもしれない、と言いだした。日本人がユダヤ人の歴史に興味をもつてくれるのはうれしいらしく、なんとかして助けたいと思ったようだ。

彼はユダヤ系で、プリンストン大学の教授だとい

う。カフカの研究をしていて、ドイツ文学研究者だった。「日本人はカフカが好きなんですよねえ」と満足そうに目を細める。その表情を見て、そういえば、カフカはドイツ系ユダヤ人だったのだと思い出した。

話をしながら、こちらのほうもこの二人連れに興味を掻き立てられていた。二人の英語のなまり方の違いが気になってしかたがない。ジャーナリストの女性のほうはごく自然な西海岸のインテリの英語で、とくにどうということもない。だがくだんの大英教授の英語は、どこか違和感がある。正確すぎる英語で、きちんとしているのだが、どこか東欧風のようななまりすら感じられる。思いあまつて私は出身を尋ねた。すると米国だという。驚いて「ほんとうですか」と目を丸くして聞きなおすと、「どうして」といった風に今度は彼が目を丸くしている。「もちろんですよ」というので、私はあえて言ってみた。「実は、あなたの英語は正確すぎる感じがします。ちょっと東欧風のなまりのようにも感じられ

るのですが、それはもしかしてご専門のドイツ語の影響なのでしょうか」。すると彼はちよつと考え込んだ。そして、「おそらくそれは自分がニューヨークのブロンクス出身なのでその下町なまりを消すために、エリートが多いスタンフォードにはいつてから、努力してきちんとした英語を話そうとしたからでしょう」と言う。折り目正しく端正で、避暑地から降り立ったような服装に身を固めた教授はとてもブロンクス出身とは思えない。

ブロンクスは典型的な労働者階級が住む地域だ。日本ではユダヤ人というところとほとんどが金持ちでインテリだと思われているが、ブロンクスには日々の生

活を支えるのに一生懸命なブルーカラーやホワイトカラーが住んでいる。

彼は、ナチス・ドイツの迫害を受けドイツから移住した父親をもち、苦勞しながら奨学金で大学に行き、西海岸の名門大学で勉強して「教授」となった。そんな彼の文化的背景に思いをはせつつ、彼の父親について聞いてみた。

彼の父はヘブライ語でアシケナージと呼ばれるドイツ系（東欧系）のユダヤ人で、スファラディム（ヘブライ語でスペインの意味）と呼ばれるイベリア半島系ユダヤ人とは文化的・宗教的伝統が異なる。彼は言う。「私たちアシケナージは生真面目で面

白みがないと言われます。北米に移住した人たちのなかには金融業や貿易がすさわっていた人だけでなく、教育家や技術者、皮革業などの技術をもつ人たちが多かったはず。とくに中・下層のユダヤ人たちは収入や社会的地位が高いコミュニティの仲間助けられたはず」。

それから彼らは先を急ぐ様子でシナゴグを去っていった。私もホテルへの帰途につきながら、彼の父親がたどったであろう北米での道筋について思いをはせた。私がアメリカに住んでいた時、たしかにユダヤ系の人々に会うことが多かった。私の周囲といえればみな高等教育を受け、それなりの収入を手に入れている人々だったから、行く先々でユダヤ人に遭遇すると、たしかに学界にはユダヤ系が多いな、と感じたものだ。

全世界ではユダヤ人の人口は二千万人ほどで、アメリカにはイスラエルに次いで多く、六八〇万人くらいが生活している。三億二千万人のアメリカ合衆国で、たったの〇二パーセントだ。それにもかか

わらず、アカデミックな世界をはじめとして、財界、実業界、政界、メディア界などにくまなく進出して新聞や書籍でもユダヤ系の人々が目白押しだ。また、一般に、ユダヤ人の平均収入は他のコミュニティと比較して突出しているとされる。ブロンクスに住むユダヤ人たちを見ていけばそうは思えないかもしれないが、それでも極端に生活に困ることはない。生活設計がしっかりしていて、高齢者になっても路頭に迷うことはなさそうだ。他のコミュニティに比べると、安定した生活ぶりだといえるだろう。このような確固とした生活基盤はどこからくるのだろうか。

3 アシケネージの ジョシュア・ゴートラーさん

アシケネージといわれて思い出したのは私が住んでいたアメリカのシアトル市で会ったユダヤ人のことだった。謎の教授の父親と同じようにドイツから脱出し、アメリカに一二歳の少年として渡ってきたジョシュア・ゴートラーさんと巡り合ったのはユ

ダヤ系の高齢者介護施設だった。

この高齢者介護施設は全米でもトップ三内にランクされるほど素晴らしい施設で、米国に住んでいるユダヤ系の人々のなかでも憧れの的だった。だが、ユダヤ系で高齢者であれば、空きがありさえすれば誰でも入所できる。リッチな人は必要とされる全額を支払い、貧しい人は政府からだされる社会保障費で賄われる。それ以上のお金をだすことはない。足りない分は寄付で賄うという仕組みで、寄付金が賄う額は三割を超えていて、社会保障費のみで入所している人も三割強だということだった。

森と湖の際にたたずむ、まるで避暑地のホテルのような施設では、「同胞であれば平等に扱うべき。死を前にしてはみな平等なのだから」といった理念が徹底していた。そこではじめてアシケナージとスファラデムという欧州からの移住者たちの文化的な差異を耳にした。

アシケナージとは、ヘブライ語でドイツを意味するが、ドイツだけでなくロシアを含む東欧諸国か

らの移民をいう。その言葉通り、やや厳格で、ドイツ的ともいえる冷徹な分析志向があり、ラバイの資格をもつ人には代々アシケナージが多い。他方、スファラデムとはヘブライ語でスペイン人の意味で、商業に秀でていて、芸術的・神祕主義的な才能をもつ傾向がある。アシケナージから見ると、ユダヤ教の厳格な定義を知らず、儀礼などもわかっていない。むしろそれは歴史的に彼らがイベリア半島で棄教を余儀なくされ、ラバイなしに半ば秘教的に隠れて伝統を維持してきた歴史があるからだ。この介護施設で聞くと、その性格の違いははつきり出てくるようで、むしろん言語も異なっている。管理運営には全般的にアシケナージがかかわっているようだった。

ゴートラーさんはユダヤ教の教えについて私に詳しく説明してくれて、伝統的なユダヤ人ならばシャバス（聖なる金曜日）には歩いてシナゴグに通わなければならないのでシナゴグに近いところに住んだものだという。

私はシナゴークの礼拝にも何回か参加した。そこでは男女の座る場所が区別されていて、女性はつばのついた帽子をかぶり、長いスカートををはかねばならないなどルールがあり、私もそれに従った服装をしたものだ。ラバイの話を聞いて黙とうをした後、ホールの下にある食堂でコーシヤー（ユダヤ教の教えで、食品の原材料から製造過程まで厳格に規定されたもの）の規定による食事がふるまわれたが、そこはなんとといっても社交の場だった。就職の話や移動の話、結婚の話など、いろいろな生活情報が飛び交っていて、みな情報交換に忙しかった。

ゴートラーさんや彼の周囲のユダヤ人たちと話をしてみても、彼らにとつてコミュニティの掟が神の教えそのものだと感じた。収入の一〇パーセントをコミュニティに寄付せねばならないことや、たとえ親族・知り合いでなくとも、死者が出れば黙って弔って埋めてあげることが最高の徳とされていると教えられた。なぜ死者を埋葬してあげることが最高の徳なのかというと、死者は「ありがとう」と言えない

からだという。見返りを期待せずに行う行為だから、最高の無私の行為だというのだ。死後の天国や地獄などの話はないかわり、同胞を大事にし、そこで施しや義務を全うすることがよりよく生きることにつながる、といったような、徹底した現世主義のように感じられたものだ。そして痛感したのが彼らの横のネットワークの強さだ。

4 北米のユダヤ系皮なめし人たち⁽¹⁾

一九世紀から二〇世紀にかけて、新興国だった北米大陸に欧州から移住したアシケナーナージたちは、米国で大きな社会的成功をおさめたが、当初から彼らのスタイルを貫いていた。欧州からのキリスト教徒たちが安くて広大な土地を手に入れて農場経営や放牧に向かっていったのに対し、彼らは点と点をつなく行商や大都市での未開拓の市場を開発しようとした。

職人や商人として生きるためには都市に居住する必要がある。住居は買うよりも、借りることが多か

った。土地を取得することで、資金を借りる時に抵当になるにもかかわらずそれをしなかったのは、手元に現金を少しでも残すためだった。また、有利な商売をするため、人々が買い物に来やすく見栄えのよい場所に店をしつらえることにも固執した。

女性や子供たちが店を営業する一方、行商人として男性は長距離を歩き回った。当時入植者たちは広大な土地にちりぢりになっており、彼らのような行商人は生活に必要なものを運んできてくれるので歓迎された。遠方の都市をつないで物資を届けるついでにニュースも運んで来てくれる。当然それは方々に拡散したユダヤ人仲間をネットワーク化することにもなった。ユダヤ人の小売り店主は、ユダヤ人の仲買人や卸売りから物資を購入したし、抵当がない彼らは仲間のネットワークを活用して、非公式で無尽講のようなユダヤ系金融組織を形成していった。そうすることで仲間内で助け合ったのだ。彼らの小売業のなかには皮革関係のものが多く、なめし業に進出する人々も多かった。皮革は必需品だったしつ

くるにはかなりの技術が必要とされていて、さらになめし工場はかなりの投資が必要だった。元手なしにできるものがない。お金がない職人たちは、まず先行してできていた、同朋であるユダヤ人たちが経営するなめし工場などで働き、お金を貯めて自分の工場を起こし、皮革製品製造にも取り組んでいった。

東欧のボヘミアから一八四〇年代に移住したウエイ兄弟の事例はその好例だ。兄弟は出生地のボヘミアですでに皮革職人としての基礎的な訓練を受けていた。だが移民してからは生活を安定させるためにしばらく行商人や小さな店を営んだ。一六年ののち、ウエイ兄弟商會をたちあげた。彼らはミシガン州のアン・アーバーに落ち着いたが、そこは狩猟民のネイティブアメリカンが多く、彼らが持ち込む獣皮からつくる毛皮や毛織物・皮革製品が重要なビジネスにつながっている場所だった。彼らは小さななめし工場を買い取り、自ら皮革づくりをはじめた。

そのあともウエイル兄弟はビジネスを拡大し、第二のなめし工房をオープンし、シカゴに本社を移した。一九〇〇年代のシカゴといえばなめし業のメッカだ。全米をつなぐ鉄道ネットワークの中心地で、牛をはじめとする生きた家畜がここに輸送され、精肉された。ハムやソーセージ工場もある。ここになめし工場をつくるのは当然の成り行きで、かつては四〇以上のなめし工場がひしめいていたのだ。フレッシュな原料を当て込んで、靴や靴磨きクリームメーカー、天然の馬毛などを使うブラシメーカーなどもシカゴに工場をかまえていた。

●世界的皮革メーカー、ホーウィーン

活気があったなめし工場は二〇世紀後半になると開発途上国の安い皮革におされて見る影もなくなっていたが、今でもシカゴにある世界的な皮革メーカーのホーウィーンもユダヤ系だ^②。

ホーウィーン商会は一九〇五年にウクライナ移民のイサドール・ホーウィーンによって創設された。五世代にわたり、家業としての皮革をつくり続け、

世界でもトップクラスの天然なめしの革をつくっている。ホーウィーンの創設者イサドール・ホーウィーンはウクライナ出身で、そこで皮なめしの技能を習得した。その技術をもってアメリカに移住したのが一八九三年だ。資本を稼ぐために、彼はそれから一二年あまり、シカゴのなめし工場で働いた。同社は、皮革のなかでもっとも高級なコードヴァン（馬の臀部を利用した高級皮革）をつくっていて、現在は一〇〇種類以上の皮革をつくっている。

彼らは次第にビジネスを広げ、スポーツ用品、フットウェア、工業用パーツや付属品、家具内装（革張り製品）などの会社に分岐していく。NBAのバスケットボールやNFLのラグビーボールも製作し

ているが、よく知られているのは革靴で有名なティンバーランドとの提携だ。ティンバーランドもまたユダヤ系移民が皮なめし工場からスタートし、グローバル企業になった会社だ。

南北の新大陸に自由をもとめて移住していったユダヤ人たちがはじめ、成功した職種には、皮革業があったのだ。このことはあまり知られていない。しかし欧州でユダヤ人たちが専業としていた職種に皮革業があったことを考えれば、彼らが北米でも開拓時代に皮革産業を担っていったことは当然の成り行きともいえる。

広大な北米大陸を渡り歩き、皮革業を盛り立ててゆくにはネットワークの力がものをいった。つまりユダヤ人たちがかつてアフリカと地中海世界、欧州、中東をつなぎ、皮革業を発展させていった歴史に果たしたコミュニティのネットワークの力が、再編成されていったのだ。南北の新大陸に自由をもとめて移住していったユダヤ人たちが、かつて欧州で成し遂げたように、北米でも、皮革業での成功によ

って得られた利益により、他の職種へと進出する切符を手にしていったことは間違いない。

か皮革業が利益を生み出し続けるには過酷な競争に勝ち抜かなければならない。それには大規模に世界的な展開をしてゆくか、あるいはニッチな領域で超高級品をつくり続け、その職人ぶりによって生き続けるしかないだろう。超高級品をつくるホーウィーンの戦略は西ヨーロッパのファッションハウスのやり方に似ている。日本の皮革の世界でも同じような戦略をとる業者はいるに違いない。今回は日本の超高級皮革をつくっている工場の話をしてみたいと思う。

(1) 本節では以下をおもに参照した。

Helmreich, W. The Jews of Newark and Metrowest: The Enduring Community, Transaction Publishers, 1999.

Rose, E. Portrait of Our Past- Jews of the German Countryside, The Jewish Publication Society, 2001.

(2) <https://www.gentlemansgazette.com/horween-leather-company-chicago/>

にしむらゆい